

公民館だより

H2.4

良地区
由公民館

一年を親みて

公民館長 小松忠衛

この一年は、丹後リゾート開発構想圏の中にあつて、今後の由良の姿をどのように描いていくべきか、じっくり考えてみる一年であつたと思ひます。変化の激しい世の中で、そんなことが考えられないと言われるかもしれないが、逆にそれだからこそ私達は、学習しなければならぬと思ひます。私達には、その責任もあると思ひ、無関心ではなく、少くとも前向の姿勢がほしいと思ひます。

公民館では、皆さんからの提言もあり、平成元年六月から、月一回の土曜座談会をはじめました。先ず由良の現状をよく知り、お互の思つていふことを話し合ひ、学習しながら何かつかんでいきたいと期待してました。お互、仕事をもち、家庭のことなどいろいろあり、その上、公民館の広報活動、運営面などまづい点もあつたと思ひますが、参加者が少なかつた。六月二十一人・七月十五人・九月十三人・十月二十一人・十一月十四人・十二月七人で参加者が固定

した感じ。一月の自治学級は、市政の中での由良の現状なり、将来構想を知るよい機会であつたが、それでも三十五人というさびしさ、先ず、正確なことを知らなければ、いいかげんなデマがとぶだけで逆効果になる。由良はどうなつてもよいのだろうかとい心配になる。「声なき大衆」といわれるように、心配はないと思つていても、意志表示がなければどうにもならない。

アンケート調査という方法もあるが、公民館の現状では荷が重い。上意下達でなくて、地区の意向をまとめて、上にとどけることができれば、もっとよりよい由良になると思ふのだが。人生八十年時代とか、不老の時代とか言われる中で、地区民全員が、真剣に考え取組まねばならない時だと思ふ。

参考までに

◎ 国民的課題である同和学習参加者三十八人・国民の義務である各種選挙における由良地区の投票率(%)	(全投票所三十の中で)		
年	市の平均	由良地区	順位
六二、	七四・一七	六九・七三	二七位
六三、	七一・二一	六五・四五	二九位
元、	七三・五七	六七・六四	二九位
二、	八三・九九	八三・〇六	二三位
種類			
府会			
市長			
参議員			
衆議員			

◎学校のグラウンド拡張について。
このことについて、小学校の児童数が少いのには、そんなこととせんでもよいのに、という話を聞きませぬ。
これからは、社会人のスポーツがますます必要で大切になります。地区民の要望により拡張整備されました。夜間照明もお願いしており、平成二年度中には夜間スポーツもできるようにする予定です。

報 告

(小松)

一、第五回市民綱引大会

日時、平成元年十二月十日(日)

会場、宮津市民体育館

由良出場チーム

・男子Aチーム 岸田秀樹監督他十名、

・男子Bチーム 中西隆光監督他十名、

・女子チーム 中西きく代監督他八名、

・由良少年野球チーム、

今年、は女子チームが初挑戦、何とか宿敵上宮津チームを破らんものと、体育館、路上、センター前広場と場所を替えて夜間練習五回を重ね、チームワークづくりとノウハウを身につけ大会に臨んだが、又しても敗れ捲土重来を期す。

成績

男子Aチーム 三 準優勝
女子チーム 三 位
少年野球チーム 三 位

二、成人式

日時、平成二年一月十五日 午前十時

式場、宮津会館

新成人参加者二百七十三人、宮津踊り振興会による見事な伝統芸能、宮津踊りで開幕、二十一世紀に向かつて力強く大人の一步を踏み出しました。おめでとう新成人。大きく羽搏いて下さい。

由良地区成人式参列者

上良 あゆみ、土岐 美喜、松村 早苗、

足立 延之、糸井 博幸、中西 昇、

中西 真奈美、中西 美企子、中西 充博、

玉垣 知子、中西 利一、山本 洋子、

山田 康子、 (順不同、略敬称)

三、第五回同和学習会(公民館、婦人会共催)

日時、一月二十一日(日)午後一時三十分

会場、由良の里センター

日程、

(1) 講和「同和問題の本質」 小西 嶺人先生

(2) 市社会同和教育指導員 小西 嶺人先生

啓発映画

①「部落差別のおこり以前を考える」

②「部落差別のおこりを考える」

③「部落差別解消への歩みから考える」

(3)、分散会

第一分散会

司会、中西 嘉重郎氏

助言、小西 嶺人指導員

記録、小倉 勇次郎市社会教育係長

第二分散会 藤本 貴美子婦人会長

第二分散会

司会、中西 房雄氏

助言、太田 勲与謝教育局社会教育主事

記録、小室 二三子市人権擁護委員

参加者、奥野 博公民館文化部副部长

男子、三十八名

女子、十六名

(4)、分散会における主な意見

◎ ほんとうの部落問題がわからなかったが、映画を見てよくわかった。皆にも見てもらったら意識が変るのではないか、なるべく多くの人に参加してもらって学習すべきである。

◎ 少しづつではあるが、勉強してきた成果が表われていると思う。

◎ 公民館の課題は、沢山の人に研修を受けてもらおうよう考えることである。それを家庭へ持ち帰り、家庭で話し合ってもらいたい。家庭で、子供達の問いに正しい答えができるよう学習しなければならぬ。学校での人権教育の取り組の調査で、部

落差別を知った時期は、小学低学年が一番多く、知ったのは、家庭で母、祖母など家族から聞いたのが一番多い。だから、同和学習は常にしなくてはならない。

◎ 今一番問題なのは、結婚問題である。家族の反対に合、結婚できない現実がある。本人だけでは解決できない。家庭で地域で話し合って解決していかねばならない。

◎ 同和教育が、逆に差別を生むことがある。不十分な学習では差別を助長する。

◎ 由良地区は、学習会ができて大変よいことだ。他地区の中には、差別を助長するの

で、やめた方がよいと言われることもある。私達は、部落差別という古いものを受け

ついでいる。この学習会を通じて、自分の中に古いのものを、脱ぎ捨てる機会としてほしい。

紙面の都合で、ほんの一部しか紹介できません。まとめができましたら、希望者には、お渡ししたいと思えます。

四、第十回四部対抗一般男女バレーボール大会

日時、二月四日(日) 午前九時

会場、由良小学校体育官
激励の拍手と声援の中で、お互の親睦を暖め楽しい一日でした。チームづくりが大変なようですが、この過程こそ大切にしなければならぬと思えます。

成績	男子の部	女子の部
優勝	第一部	第三部
準優勝	第二部	第四部
三位	第三部	第一部
四位	第四部	

五、第九回四部対抗囲碁大会

日時、二月四日(日) 午前九時
会場、由良の里センター

優勝	第二部	準優勝	第三部
三位	第一部	四位	第四部

六、第五回自治学級 (参加三十五名)

日時、二月十一日(日) 午後一時三十分
会場、由良の里センター
テーマ、宮津市政と地域の発展
助言者、由良地区選出市議員

中西 孫兵衛氏
山下 伊左衛門氏

市政報告(項目のみ)

- (1) 中西 孫兵衛議員(三十分)
 - ◎ゴルフ場、
 - ◎由良川マリナー、
 - ◎階段式堤防工事、
 - ◎流出重油回収、
 - ◎潜堤、
 - ◎リゾートマンション、
 - ◎小学校グラウンド拡張、
- (2) 山下 伊左衛門議員(三十分)
 - ◎四府総、
 - ◎京都縦貫高速道路、
 - ◎新生宮津線、
 - ◎ハリゾ

リゾート開発、 ◎企業誘致、 ◎朝市、
◎新浜沖埋立地、 ◎流域下水道、 ◎ゴ
ミ清掃工場、 ◎ふるさと一億円、 ◎湊
橋(ヨット型)、 ◎学校建築と社会体育、
質疑応答、(紙面の都合で一部) Q&A

- Q、市と、リゾートマンションとの給水契約は
どうなっているか。
- A、まだできていない。
- Q、クアハウス(多目的温泉保養施設)さまざ
まな入浴設備と、トレイニング設備をもち、
健康づくりを旨指す施設)を由良にほしい。
- Q、北近畿タンゴ鉄道は、三市循環特急を考え
てほしい。
- A、検討されていると思う。
- Q、ゴルフ場問題はどうか、又ゴルフ
場問題だけでなく、由良総合開発について
検討する新たな機関が必要である。
- A、ゴルフ場は、今までとちがいが、リゾート構
想の中で考えられていく。問題点については
、学習会がもたれながら検討されていくと思
う。いずれにしても、地元の意向は無視でき
ない。
- Q、グラウンド拡張に関連して、夜間照明が是非
共必要。丹後地区への修学旅行、リゾート観
光面も考えて、夜間のスポーツは欠かせない。
- A、平成二年度には可能と思う。
- Q、由良の下水道構想はどうなっているか。
- A、できるだけ早く着工できるように努力してい
る。

Q、グラウンド拡張は、社会体育とのかゝわりもある。ゲートボール、テニス、バレーボールなどは考えてしかるべきと思う。

A、検討する問題である。

Q、由良区民の、市の職員採用が少い。何とかならないか。

A、先ず一次試験にパスすることが必要。

Q、森ヶ鼻道(通学路でもある)の整備が悪い。

A、圃場整備が終れば努力する。

Q、高層ビルと、景観条例はどうなっているか。

A、条例はつくる予定、梯子車も考えられている。

Q、由良地区の除雪計画を検討し直す必要があると思う。

ほんのさゝやかなボランティア

藤本 貴美子

平成元年度、婦人会に於ては、由良地区の高令化が進んでいる中で、ボランティア活動が遅れているに気がきました。そこで、人生八十年代と云われている現在、核家族が進み、一人暮らしの老人が由良地区でも四十名余(六十五才以上対象)もおられ、他地区では既に始めておられる給食サービスをさせて頂く事にしました。何しろ始めての事なので

他地区の役員さんに尋ねたり、又、費用の方は社会福祉協議会の御援助を頂きまして、私達婦人会役員が、手作りでお昼に合う様にお弁当を、配らせて頂きました。大した事は出来なくて、お口に合わない方もあつたらうと思ひますが丁度大雪と重なつて、たいへん有難かつた御礼の電話が殺到し、私達役員も、うれしう限りでございました。昨今、私達は、平和でありすぎて、優しい心、思いやりの心、助け合いの心を失つて、優しう思ひます。自分さえ良かつたらよい、自分の事しか考へていないといふのは人間として失格だと思ひます。

戦争中は、皆、真剣に助け合つて生きて来たと思ひます。これからは高令化という、戦争の中に巻き込まれて行かぬばなりません。元気で、出来得る時に今、少しでもボランティアの貯金をしておき将来、私達もこの道に入つた時に、利子として少しでもお返しして頂けたら幸福です。他の婦人会活動をしなから、ボランティアで、充分な事は出来ませんが、一応、人並みのボランティアの仲間入りが出来たと安堵しております。だんだんと、由良地区でも核家族化が進み、何とか若者を地元に残す事を考へねばなりません。唯今、由良地区でもリゾートの問題が進みつゝあります。他人事でなく、私達地域の問題であるので、皆、関心を持って話し合ひ勉強をしなければならぬと思ひます。そして由良の地域の皆が、仲よく助け合つて豊かな住み良い街づくりに勤めたいと思ひます。ボランティア活動にしても、個

々に、わずかな人が活動しておられるようですが、一ツのグループが出来たら活動しやすいのではないかなと考えています。今年度、婦人会が取り組んだ、ほんのさゝやかなボランティア活動の報告をさせて頂きました。

成人になつて

中西 利一

私は、今年成人式を迎えたわけですが、その心境と言ふのは、正直な所、嬉しさと不安感の入り混じった複雑な心境です。嬉しさの方は、やっと一人前になれたという自己満足感です。これからは、今までの様々な束縛から解放され自由に行動できるといふ解放感と、反対に不安感も、これからの自分の行動の一つ一つに自分で責任を持たなければならぬといふことです。成人になつて、すぐに総選挙に当たり、初めての投票をしたわけですが、やはりここにも一有権者としての責任を感じました。今、日本は世界の中で一番、平和な国となつていますが、これから先、私たちの若さといふ武器を思う存分発揮して、この平和な社会を維持していきたいと思ひます。

同和研修会に参加して

小室 二三子

同和問題は人類普遍の原理である人間の自由と平等に関する問題であり、日本国憲法によつて保障された基本的人権にかゝる問題であると云われております。特に近代社会に於て部落差別は一口に云えば市民的権利と自由（職業選択の自由、教育の機会均等を保障される権利、住居及び移転の自由、結婚の自由）等が同和地区住民に對しては完全に保障されておらず、同和地区に於て未だに解決されず差別が厳存し人権を侵害している今日、同和問題の早急な解決こそ国の責務であり同時に国民的課題であると同和对策審議会答申に述べられております。由良地区に於ける公民館、婦人会の同和研修会は今回で五年目を迎えました、最初は寝た子を起こすな、そのまゝそつとしておけばいつか解決されるといふ声も聞かれましたが、その後、そうでありませうか。徳川の代から三〇〇年余を経て今日なお根深く残っている差別が現実には人々の心の中に意識として残っているという事です。一人ひとり心が心から差別を拂拭することが出来た時、はじめに人権を基調とした真の民主主義社会が築かれること、思ひます。私達の分科会では、学校教育の立場からの同和教育の取り組み方、又心の中に思つておられることを本音で話しあい、どうすれば差別がなくなるのか等時間を

が足りなくなる迄熱心に意見を出しあいまました。同和問題のマンネリ化等云われませんがまだまだ話し合いも不充分であり、もっと度重ねての真剣の研究して居ります。この問題解決の糸口がつかめるものと確信いたしました。

同和問題に関する意識調査の中で“あなたはいつ部落のことを知りましたか”の問いに対して大半の人が小学生から中学生迄にたと答えて居ります。又誰から聞いたかという問いに対しては父母から又家族から聞いたかというのが最も多いとのことであります。このことから親が同和問題をもっと正しく理解して家庭に於いて子供達に正しい教育が出来る様研修しなればならないと思ひます。

心理的差別は私達が解決していかねばならないという認識の上にとつてこれからもどんどん研修会に出席し、又その人が皆んなに啓蒙していく、そして学習の積み重ねによって二十一世紀までには差別を希ってやまないという決意で早期解決が出来ますこと

『ふれあふ』

『対話が育てる子の未来』

防犯協会

自治学級に出席して

中西 一雄

去る、二月十一日、由良の里センターにおいて、公民館主催により自治学級講座が開かれました。幸い当日は天候も思わしく無く、家の仕事も一段落付いたので、私も一度どう言う話か聞きたく、思い切つて出席させて頂きました。テーマは、「宮津市政と地域づくり」と言う事で、地元の二名の議員さんが話をして下さいました。先ず、中西議員が宮津市政の事、次に山下議員が今後の由良の変動について詳しく報告、及び説明をされました。質疑応答、意見交換の時間も設けられ、活発な意見も多く出され、話の渦の中、私自身圧倒されるばかり、これは私も、今の若い者は一人に過ぎない、この実感を感じました。話も終り、里センターを出た時、何かしら自分自身が一回り大きく成った、人生を四・五年先取りしたような錯覚にかられました。折角のこの言う機会にたつた是だけの出席者では、地域の全員の出席が有つても過言では無いほどの内容の自治学級であつた事は間違ひではないように思ひます。出席者の中には、親子で出ておられる熱心な人も見受けられました。私自身、今後こう言う機会があれば必ず出席し、自分自身の為、そして大きく言えば地元の人の為、役に立てる人間に成れるよう、身の廻りの事、世の中の事、視野を広めて勉強したい。これ迄般に閉じ込めていた自分が恥ずかしく思ふ。初老を迎えた今十代に戻つた気分が出直したい

土曜座談会に参加して

宮本 竹田 茂

この座談会は、昨年六月から始まり、毎月第二土曜日の夜八時から由良の里センターで開催された。参加者は毎回十数名、年代別では、おおよそ三十代二名、四十代四名、五十代以上十名であったと思う。第一回目は、六月十日。最初に公民館長さんが挨拶の中で、土曜座談会のいきさつを、以下のように話された。「昨年の自治学級の中で、もっと由良の将来について考える場があつてもいいではないか」という提案があり、今回座談会を開催することにした。由良の将来をどう考えていくのか、由良地区の発展について、農業のこと、観光のこと、下水の問題など何でもよい、気楽に話し合える場にしてほしい」と考へて座談会であるから、意見等どんな出しほし。

座談会では、昨年十二月公民館だより七十九号でその概略がすでに配布されているので、この紙面では省略します。

座談会を重ねるうちに、さまざま意見が出た中で、「やはりもっと由良の人が由良の事に関心を持つべきである。」、「なぜ関心がないのか。特に若者の参加が少ないのはどうしてか。」等が出された。関心が薄い原因は考えられないことはない。一つには、由良の住民の中で、由良に密着した生活をしていない人が、少ないということ。朝、由良の外へ働きに出て、夜帰って来る人が多いということであ

る。二つ目は、三十年前に由良が官津市に合併されたことによるのではないか。

合併以前には、由良村として一つの行政組織として、物事が運営されていた。そこでは由良の住民による自治が確立し、由良の案件は由良住民の合意に基づきし処理されていたと思われ。だから住民は自ずから案件について、その経過から結果まで知り得たから、関心は現在よりも高かつたと想像される。

現在の状況は、由良の案件はすべて宮津で決定されておられ、由良の住民でその内容や経過を知り得るのはほんの少数である。大部分の人はたとえ知り得たとしても事後になつてはいる場合がほとんどである。さらにも、その状態が三十年も続いているのである。さらにも、その案件の内容を聞く場合も、意見を述べられる場も無かつたに等しいのである。社会が豊かになるにつれて、個人の生活を優先に物事を考える風潮と相まつて、関心が薄くなるのは、当然だったのかも知れない。

この座談会を通じて、「出された意見を、由良のためにはどのよう反映させたらいいか。」、「由良の住民にいかに関心を持つてもらうか。」が問題として残りました。公民館長は、「公民館活動としてのこの土曜座談会は、財力もないし、社会教育の場であり、直接行政に働きかけたり、要求したりして行く組織ではない。」と述べられた。

そこで、「出された意見を地域の問題として大きくして行けば、行政に反映するのではないか。」としようとするため座談会では話し合われた。由良の案件を由

良住民が検討し、決定する場としての『由良地区総会』の開催である。この総会で決定されたことを行政に反映するべく要請して行けば、必ず予算化され、具体的に実現すると思う。

又由良には、数多くの○○協会、××会、△△委員会等がある。これらの組織、活動内容は、外部の者には、なかなか伝わって来ない。各組織とも、由良の発展のために活動されていると思う。

例えば、観光協会では、おそらく民宿をしている人と旅館を営んでいる人が中心に活動されていると思う。この観光という問題は、今、リゾートとの関連で非常に脚光をあげ、重要なテーマの一つになっっている。そこで直接、携わる人だけでなく一般の人も参加し、幅広い分野から英知を集めて、由良の観光のあり方について考えて行くべきだと思う。

実業会然り、○○会も然り。このように、現在、当時者だけで組織し、活動している○○会、××会、△△委員会等の組織の活性化と合せて、それらの組織が『由良地区総会』の中で由良地区住民に活動を報告するなり、意見を聞くなりすれば、きつと今とは違ったものになり、由良にとってもプラスになると思う。以上、一年間、土曜座談会に参加し感じたことを書きました。

この座談会は平成二年度も継続されるようです。ぜひ一人でも多く参加し、由良の現状や将来について意見を述べてもらいたい。

特に若い人にはぜひ参加してほしい。身近かな事を考えることは決って次元が低いことに係ることになつてしまつたといふことではない。むしろ

逆に、生活優先、量から質の時代に、自己の生活環境、生活基盤から物事を考え、行動して行く時代になり、さしかかつて来ているのではないだろうか。

大いに語ろう、これからである。〃

バレーボール大会に参加して

一部 奥野 彰

私は、約二十年前の中学のときバレーボールをして掛かりました。毎年この時期になると審判と選手の声が掛かります。しかし、二十年も経つとバレーは変わり体力の衰えも著しく戸惑うことばかりです。例えば、頭の中では、目の前のボールは軽々と拾えるし、スパイクは強烈にコートに突きささるのですが、現実には厳しく、目の前のボールに手も足も出さず、スパイクは緩やかな放物線を描いて飛んでいくだけです。だから、「何かスポーツをしななければ」と思うのも毎年この時期のことです。

さて今回は、エースが欠場しており「参加することに意義がある」とメンバリの全員が思っていたわけですが、なぜか一部が優勝してしまいました。試合後の優勝記念大祝賀パーティでも、メンバリの頭の中は「？」のオンパレードでした。しかし、バレーボールの経験があるから言えるのかも知れませんが、勝つても負けても「？」で楽しい一日でした。

四部対抗バレーに参加して

大森 美代子

由良へ嫁いで十二年、すっかり由良人になれた？
 と思つて居るのですが。
 ママさんバレーの仲間に入れてもらつてからバレーのおもしろさを知り、「こんなことなら、中学のクラブからバレーばかりしとくんやつたな。」と同じ仲間達と日々口惜しく言つておりました。「一つの目標をみんなで目指しながら作つていくチームワーク、地区の違う人達との情報交換、アフタースポーツの楽しさ、等々、この年になつても得るものは、とても多くあります。
 スポーツは参加することに意義があるとは言え、やはり勝利は嬉しく、ことに私のように「じゃまになつたらあかん、足ひっぱつたらあかん。」と、初心者マークの者は、格別です。今回も、浜野路女子の優勝という伝統が守れ、とても嬉しく思つております。しかし、こうして試合に出さしてもらつたり、週一回の夜の練習も、家族みんなの暖かい理解と協力があればこそと、いつも大変感謝しています。尊敬するある先輩は、世に言われる宿敵「嫁、姑」で、バレーを続けておられますが「ステキだなあ、あ、」と、感動の一途です。
 スポーツの輪、家庭の輪、しいては地区の輪と、みんなので明るく楽しく、やつていきたいと思つてい、ます。どうか宜しくお願いします。

レ ッ ツ ン GO

由良囲碁同好会

本年二月十一日付の朝日新聞に「百二歳で囲碁五段に合格」という見出しで、鳥取県の男性最高齢者が日本棋院の認定テストに挑戦し見事に高段の免状を取つたという記事が載つていました。これは碁のもつ素晴らしさを物語つていゝといえましよう。その人は「囲碁は頭が洗練されるといゝところが楽しい。六段はとても無理でしような」と言いつつながら、さらに上級を目指して氣力をみなぎらせていると報じていました。
 碁を打つ楽しみの一つに「碁石に夢を托す」ことがあると思ひます。自由にえがく構図に従つて盤面のどこへ石を置いても良く、また相手の反応によつては次々と新しい図に変えることが出来ます。常に新しい夢を追ふことは忙しい現代人の生活にも潤いをもたらしてくるのではないでしようか。勿論、勝負を争うので強くないと願うのは当然ですが、その勉強は相手がなくともやれます。本で定石を学び、詰碁を考え、あるいはプロの打碁をならべたりするの一人では出来ない上達への道です。
 由良の囲碁人口がどれ位かは分りませんが有志で囲碁同好会を結成しています。会員だけで楽しむ月例会の他に、由良公民館主催の四部対抗戦をしたり、宮津市公民館や宮津市農協主催の囲碁大会へいず、栗田との親善碁会をして交流を深めております。

興味をもたれるなら、始めての方でもいちど気軽に里センター横の”憩の家“を覗いてみてください。原則として毎月第一・三日曜日の午後、小人数でもやっています。初めに紹介した百歳翁に負けない気力のある生活を求めていこうではありませんか。

午後よりは服など替えて門を出ず

若き基敵を打ち負かすべく

(歌人 山本 牧彦)

グラウンドの拡張整備について、

由良小学校長 岡本 功

十二月から小学校のグラウンドでは、大型機械が動き拡張整備工事を続けています。この工事は、由良区民の体育、スポーツの振興のため「広いグラウンドがほしい。」「夜間照明の設備もほしい。」という由良区民の要望に応えて、電源立地促進対策交付金事業として通産省から交付金を受けて行っている宮津市の事業です。約二千万円の工事であり三月中旬には完了する予定です。学校体育のためにも、区民の生涯スポーツのためにも有効な機能を発揮するグラウンドを整備されることを重点に、学校側は教育委員会と連絡をとりながら工事を進めて来りました。一番大きく様変わりしたところは、一段高い中庭が校舎から六メートルの所まで削られ下のグラウンド

面につながったことです。野球をする場合の広さと長さを確保するためです。南側の森は、工事をすることも野球をするにも都合であったのですが、由良小の特徴の一つでもあり子ども好きな遊び場でもありますので残すことを条件にして来しました。

草の生えていた表土は削られ盛土されて広くて美しいグラウンドに変わり、春からいろいろな体育クラブが使用できますが、あくまで学校体育及び子どもが生活に支障のない範囲でのことであり、あそこはゲートボール、ここにはテニスと固定した施設を設け専用コートを決めることはできません。それぞれグラウンドの代表と学校とが連絡調整をとりながら有効なグラウンド使用について話し合っていく必要があります。

平成二年度には、二期工事として夜間照明の設備ができるように聞いております。やがて夜にも使用できるグラウンドになるわけですが、喜んでいいことばかりではありません。すでに、宮津、野田川には夜間照明のある小学校のグラウンドがいくつもあります。そこでどんな問題があるのか、青少年健全育成の面から使用者のマネーの面から十分な話し合いがもたれなければならぬと思います。ともあれ、新しく生まれ変わるグラウンドが由良の人達の健康づくりのために、又、人と人との信頼関係を深めていくために、そして由良の活性化に役立てようというグラウンドにしていこう、みなさんに考えていただきたいと思います。

健康いろはカルタ

四方 寿朗

つ、常に忘れぬ 感謝の気持
地球上では四億種以上の生物が、何億年という長い年月、お互に分をわきまえて共存して来た。人間が生きていくための酸素も食糧も燃料も、すべて他の多くの生物のお陰である。近年開発と稱して人間の自然破壊は目に余る。万物の霊長などという思いが上りを捨てて、地球を大切に謙虚に生きたい。

ね、眠ろうとあせる心が、目を覚ます

特別の場合を除いて、人間は睡眠不足で死ぬことはない。むしろ朝まで起きていようと、あせらず気楽に本でも読んでいれば、自然に眠れるものだ。

な、情は人のためならず

人に情をかけておけば、自分にもよい報がめぐって来るという意味。現在は自分さえよければよいという時代だ。しかしこの世は所詮一人では生きて行けない。体の丈夫な間は出来るだけ世間のお役に立っておきたい。

由良 歴史と文化財 (三)

山椒大夫伝説の周辺 その五

今回は、前に続いて、中世のムラはそのナワバリを守るためにどうしたか、その中で、山椒大夫はどう対応したか、また、対応せざるをえなかったかについて考えてみたいと思います。
当時のムラ人達は、百姓と言っても、後に豊臣秀吉の刀狩りで、完全に武装解除される迄は、弱い、哀れな、頼りない階層でありませんでした。中世の百姓達は、必要があれば刀を取り、槍を持って集まり、実力で自分達のムラを守るために、戦うことができる集団でありました。百姓が、ただ、抑えつけられ搾りとられる人びとであつたと思ひこむのは誤りです。だから秀吉は、天下統一したからには、百姓に帯刀権を認める必要はないと考へたのです。
「百姓は農具さへ持ち耕作を専らに：(中略)：農桑を精に入るべき事」にしようと思ひました。そこで、諸国百姓達が「刀、脇指、弓、やり、てつはうその外、武器のたぐひ所持候事」を全面禁止にしたのです。この事は、とりもなおさず、この様な武器も、一般に「諸国百姓」の者の家に、必らずといつて存在していたと言うことです。家によつては、具足も持つていたのです。荘司・代官家の下人達は、何時でも、武者として編成できる集団をなしていましたし、ムラに生活している人達も耕作・浜仕に従った百姓の外、修験の山伏、商人、職人達を含めて、そ

の中には、すでに、莊司・代官家の支配下にあつた者もあつたと思われぬ。ムラ人の中にも、当然、力自慢や武藝、弓矢・刀槍だけでなく、投石の術も充分、その用をなす者もありました。こうした者は、一部は、莊司・代官家に駆けつけ、その寄騎「与力」として戦いに加わつたかもしれないし、他の一部は、女、小供、老人達を率いて、山中の小屋にひそみ、ムラに重要な書類・什物を守りながら、戦乱の渦の通過するのを待っていました。そのため、必要な武装も、当然、施してはいた筈です。廻が、彼等は、逃れかくれていただけではありませんでした。若し、敵が敗走するのを見れば、その落武者を追つて具足・武器類を奪つたりしました。落武者を狩ること自体は、罪科として追及される行為ではないとされていたのです。

例えば、由良では、洪水や大雨の時、上流から流れてくる材木や財物を集めて、それを集めた人が、其処にシルシをつけておく風習がありました。これを「寄木」といって、拾つた人の拾い得として認められていたのです。それは、何であれ、ものが落ちたとき、すでに、誰のものでなく、言わば、神のものであり、拾つた物は神の授かり物という古いしきたりをも、そのまま伝えたものであります。落武者にして、その考え方は、同じところから出ているものなのです。

莊司・代官或いは下級の莊司である公文職となつた山椒大夫は、春が来ると耕地・塩浜を含めて田地の割当、分配したり、塩釜の貸与、その他、収税を確実にするための業務を処理し帳簿を作り、或いは

農閑期を利用しては、ムラ人に夫役を課し、池溝・用水の補修などを勧めたに違ひありません。新任の莊司・代官となつた山椒大夫は、ムラ人との間が円滑にいかない時期もあつたかもしれません。が、宮座での活躍やムラへの協力の実績や塩浜の経営で示した実力というものが、ムラ人の信望を集めるには充分なものでした。

ムラという処で役職者・統率者を選ぶ基準として、いることがあります。それは、その人に実力があるかどうかと、いうことです。その実力とは、先ず實産力であり、次に大切なことは、その人がどういう階層に属しているか、すなわち、家格ということでした。その上に立つて、「衆目の見るところであり、その地位にふさわしい」と推選し、互いに納得し合うというところが大事でありました。

当時の由良の周囲にも、鎌倉御家人層を地頭とする莊園がありました。これらの本来的に武士である地頭達の押妨に対抗するためには、内においてもスキを見せることは出来なかつたのです。それには、山椒大夫自身が強くなければなりません。中世のムラ人は、前にも記したように、常に武装することのできる人達でした。そういう人達を押えるだけの力と人間関係を築き上げることもまた求められたのです。きびしさとともに情を感じさせざるを兼ね備えた人としての器量が欠かせないものでした。時には、ムラ人を、直接的に使役して、家事の役に従わせたり、雑物をとり立てるなど、下人的使役を強行することをもって威迫するだけではないのです。このように、力をもって威迫するだけなく、労役

や勲功に対しては、充分な恩賞も与えた筈です。そうしなれば、中世のムラ人を押えることも、必要なきには、自分の兵力として動員することもできないし、莊園の経営も充分にはなしとげられなかつたのです。そういう強さの一面が、「三莊押領」の悪党とか、苛責無残の人物として、後世の藝能の中に描かれる因ともなつたと思ひます。

石浦には、山椒大夫が創建奉祀したと伝えられる住吉神社がありますが、その事実を裏付ける史料は存在しないとしてみても、その伝承を、事実、ありえたことという前提に立つて考えると、その創建した時期こそ、山椒大夫が、この由良の地で名実ともに、その権力を確立した時期であつたと言ふことができます。

平成二年三月十日。(小谷)

【参考書】

- 中央公論社刊 「日本の歴史」 第七・八巻
- 教育社歴史新書 工藤 敬一著 「莊園の人々」
- 筑摩書房刊 「古文書の語る日本史」 5
- 平凡社刊 「ことばの文化史」 中世 1